

《第19回までのあらすじ》

主人公の小宝（林家宝）は、1937年の日中戦争開始時は、小学4年生。一家は疎開先でも日本軍の攻撃にあつ。その間に南京は日本軍に占領され、街は焼かれ、老人、婦女子も含む中国人の遺体が、各所にほうられ、凍り付いていた。長江を流れる夥しい遺体。これら全てが「南京大虐殺」のすさまじさを物語る。

日本軍支配下の南京にもどった一家を襲った事件。姉の秀華が、国民党の三青团の友人のでっち上げにより、汪精衛の特務に逮捕、投獄された。

一方、日本軍支配下の南京でも、いくつかの闘いが起こされ、人力車夫による生活を守るための2週間のスト、中央大学学生による、食費横領の校長の退陣を求める闘い、日本人のアヘン専売に反対する汪精衛政権を巻き込んだ、学生たちのアヘン撲滅運動の成功など。

十代の若者たちは、生き方に悩みつつも「抗口」のために、中国共産党の地下組織や中国国民党の地下組織「三青团」へと参加していった。従兄の希鷹は蒋介石、孫中山を尊敬していたが、抗日戦争は蒋介石への幻想を捨てさせ、共産黨員となった。

そして、ついに「夜明け」が訪れた。1945年8月、日本軍の降伏。長い間待ち焦がれていたこの時を、街中の人々が祝福した。人々は平和を望んだ。しかし、蒋介石は「双十協定」を結びつつも、片方で、共産党撲滅」を掲げ、内戦への道を開いていた。

＊この連載は、ホームページ「時事評論・エンタテインメント」欄をご覧ください。

日本降伏後、中国は平和で民主的な方向に向かうと願った多くの学生たちは、昆明や重慶での国民党、応報の特務による襲撃などの事件に当惑した。宋玉美という女子学生もその一人。『こんな事件は、多分老蔣は知らないのでは？』『私は国民党内にも矛盾や闘争があると思う。彼らの中の民主的勢力も、きつと努力していると思う。』と小宝に言った。小宝はそんな彼女はなんと純真で、お人よしなのかと心の中で思った。

一方、三青团の張子広らは仲間になんか『何が政治協商会議か？実際は共産党と民主同盟の左派分子が、平和

を願うみんなの気持ちを利用して、  
いたずらに余命をつないでいるだ  
けだ。『他の者も』その通りだ。も  
し抗日戦争でなければ共産党はと  
っくに消滅している。今、政治協商  
会議をやるのは、やむを得ずだ。国  
軍の準備が整えば、最後には共産党  
を徹底的に消滅させることに精力  
を集中する。』と秘密を洩らした。

宋玉美は彼らの口ぶりから、国民  
党上層部は、国内の平和ではなく、  
内戦で共産党を消滅させる策略で  
あるとみてとった。彼女は国民党に  
は何ら悪い感情はなく、孫中山先生  
の党で、抗日であると思っていた。  
また共産党に対しても、抗日勢力の  
一つで、江南の人民に支持されてい  
ると思っていた。

しかし、共産党が指導する解放軍  
についてはよくわからなかった。共

産党の解放区では、《生産を共有し、  
妻を共有する》とか《残酷な闘い》  
などと国民党が言っのを聞いて、一  
体どんな様子なのか？小宝に疑問  
をぶつけた。

彼女は小宝に『延安帰来』『延安  
一月』などの本を借りて、每晚部屋  
にこもって読んだ。そしてわかった  
こと・・・新四軍や八路軍が本当に  
抗日をやったこと。農村では減租・  
減息を行い、農民たちが生産を広げ、  
生きていけるようにしたこと。農民  
たちは彼らを支持するようになり、  
だからこそ、彼らが解放区に根を下  
らせること。

小宝も、農村でどうやって民主政  
治を打ち立てるのか疑問に思って  
いたこと。ある農村では、選挙の候

補者全てに一つのお椀を置き、選挙  
民はみな一粒の豆を持って選挙に

行く。そして現場で、豆の数を集計するという。『これって実にうまいよね。』と応じた。

二人は、色々なことを話し合った。解放区について知るだけでなく、社会科学を学ぶ必要があること、小宝は特に艾思奇の『大衆哲学』を繰り返し読み、大いに啓発されたことなど。二人は互いに好感を抱くようになった。

## 21 新たな出発

小宝は希鷹に借りた『中国革命と中国共産党』、『新民主主義論』、『連合政府を論ず』などのパンフレットを真剣に読んだ。自分の家のこと、抗日戦争の経過、二番目の姉、秀華と袁倫や任建のこと、かつて読んだロシアやソビエト革命のこと、フラ

ンス革命も。多くの英雄的青年たちの姿、これらすべては自分が偉大な共産党に加入するのを励ましているかのように思えた。

そして、1946年4月のある日、一面の雑草と数本の木のある小さな小山で、希鷹と二人で老沈という青年に出会った。

『君は17歳でまだ公民の年齢には達していないが、君の態度やこれまでの状況、地下工作の必要性を考慮し、市委員会は君の入党を決定した。』『君がその若さで、厳しい、生きるか死ぬかの階級闘争に参加するというのは、生死の試練に臨むということだ。成人になる前に生命が失われるかもしれない。就職も結婚もせず、自分の家庭もなく、敵の刃の下に華麗な人生とお別れするかもしれないのだ。しっかりと思想

的準備をして、国民党支配下の心臓部に長い間隠れ、苦しみに耐えて頑張らねばならない。君はそれを望むかい?』と彼は尋ねた。

小宝は何のためらいもなく、『私は心からそう望みます。』と答えた。

3月に始まったソ連赤軍の東北各地からの撤退の後、国民党軍は直ちに瀋陽に進駐し、4月から共産党軍への徹底した内戦を開始した。5月、国民政府は重慶から南京に正式に復都し、小宝たちも学校が組織した行列で、慶祝大会に参加した。

蒋介石の演説はよく聞き取れず、宋美齡の着飾った姿が見なれなかった。

その日、入場を待つ学生たちの目の前で、国民党軍の車が通りすがりの市民を押し殺した。本来は祝いであるべき復都の日に、内戦の暗雲を

思わせ、どうしても喜べなかった。

6月の後半には、蒋介石は『共産党はやはり服従しないから、一年以内に消滅すべきである。』と述べた。

内戦をやめさせたいと、6月23日、上海各界人民10万人が大デモを行い、十数人の和平請願代表が南京に行くのを見送った。その日の午後、列車が南京下関駅に到着した時、待っていた自称《難民》の国民党組織の暴徒が、どっと押しかけ、代表を殴打し、5時間に及ぶ連続暴行を働いた。有名な《下関事件》である。

卒業を前に試験で忙しい小宝たちは何の活動もできなかったが、代表が流した血は、これまで蒋介石と国民党政府に抱いていた幻想をすっきり打ち砕いた。

生は彼らをバカにした。

大学合格者の発表。希鷹は金陵大の物理学部と国立音楽院の両方に受かったが、小宝はダメだった。英語が悪かったうえ、まだ17歳だから翌年もあると、自分に言い聞かせた。父の言うアメリカ留学を拒否し、金陵大の補修クラスから先修クラスへと進んだ。

希鷹は物理学者を目指していたが、党の上部の要請に応え、音楽院に進んだ。おじいさんは『どうしてラッパ吹きや太鼓たたきのようなことを勉強しに行くのだ?』と怒った。宋玉美も金女大に合格したが、

やはり党の決定に従い、国民党が新設した南京政経学院に進んだ。個人の利益を犠牲にして全体の長期的利益に従った彼らに、小宝は感心し、うらやましくもあったが、一部の学

1947年の元旦過ぎ、北京大学

の女子学生がアメリカ兵に強姦されたとのニュースは怒りを呼んだ。

『日本鬼子の後は、アメリカ鬼子か』と怒る女子学生。宋玉美はそれだけではないと思った。上海でアメリカ兵は三輪車に乗ってもお金を払わず、車夫をたたき殺した。南京では女性を抱いてジープを運転し、大通りをめちゃくちやに走り回る、アメリカの余剰物資の粉ミルクや軍服、ズボンなどが市場に氾濫し、戦後回復したばかりの中国経済に真向から痛撃を与えている。

マッカーサー将軍による内戦調停に単純に希望を抱いていたが、国民政府は調停を利用し、アメリカ軍が国民党軍を全て輸送し終えると、全面的内戦を発動し、共産党を徹底

的に消滅させるとした。

この一年で彼女は百冊の理論書を読む以上の生きた授業を受けた。

彼女の善良な心は、非常な政治的ハ

ンマーで打ち砕かれた。彼女はこの

時期に入党し、激しい闘争や残酷な

弾圧に対決せねばならない。自分は

それを望んでいるのか？ 闘い続

けていけるだろうかと自問した。

北京、上海など多くの大学は続々

とデモを行い、南京でも金陵大、中

央大の女子学生も行動を始めた。こ

の全国を席捲した学生運動は、抗日

戦争後最初の、反米反蔣のうねりと

なった。

人々は甘い夢から覚め、少しずつ

現実を認識し、一つ一つ蒋介石のウ

ソを見破って、内戦を拒否し、平和

を求めた。労働者は物価指数を用い

て生活費の保障を求め、工商業者は

アメリカ商品の制限を要求し、教

授・教師・技師などのインテリは生

活水準の保持と、民主・自由を要求

した。

細く、小さな流れはゆっくりと集

まり、一つの方向に向かって進んで

いった。

## 23 5・20の闘い

内戦の勃発以後、人々の生活は苦

しく、米価は3倍となり、各地で民

衆のコメ強奪がおこった。とりわけ

地方からの学生たちは飢えていた。

中央大学の食堂経費の大幅削減

をきっかけに始まった学生たちの

運動は教授会も巻き込み、ついにス

トライキを決定した。5月15日、

3000人の学生を前にやむなく

出てきた文部大臣が、多少の副食費

の増額と共に』・・・今は戦争中で財政困難であり・・・』と述べた途端、学生たちは『我々は戦争はいらない！』『我々はメシを食いたい！』『お金を教育費に使え！』と声を挙げた。次に行政院（政府）に向かったデモの宣伝隊の学生は、門の「行政院」という額に《民瘦砲肥》（民衆はやせ細り、大砲は太る）の4文字を書いて抗議した。

次々と拡がった学生デモは、北京、上海、蘇州、杭州などの16の大学・高専を動かし、20日の南京で

の大デモへと発展した。スローガンは、《反飢餓・反内戦・教育危機を救え》。

中央大、金陵大、復旦大、同済大、浙江大などの7000人の隊列は、開会中の議会を目指した。国民党軍警はホースと皮のムチ、ベルト、警

棒、更には鉄クギのついた棒で、学生を滅多打ちにし、負傷者も出たが、学生たちはひるまなかった。小宝はその最前列で、大学受験に忙しいクラスの間と共にいた。学生が逮捕され始め、これ以上の負傷者を避けるため、代表が議会の責任者との団交に行った。

昼も過ぎ、学生たちのお腹はグーグー鳴っていた。と、通りの両側から、たくさんのマントウやスープが運ばれ、感動した学生たちは涙を流さんばかりに喜んだ。

午後2時過ぎ、怒ったような空に突然の黒雲、土砂降りの大雨となった。通りに座り込んでいたデモ隊はずぶ濡れのまま、大雨が洗い流すのにまかせ、高らかに歌を歌った。雨が上がり、大きな太陽が出て、学生たちの魂も洗われた。

デモ隊は道端で、国内外の記者招待会を開き、今回のデモの目的と弾圧の状況を説明し、公正な真実の報道を望んだ。代表団は逮捕された学生の釈放や医療費の負担などの要求を認めさせ、デモ隊の引揚げに妥協した。学生たちは闘争の勝利に歓呼し、スローガンを高らかに叫びつつ戻って行った。この日、北京大、精華大などの1・2万人が北京で、上海や天津でも数千人がデモを行った。

南京の《新民報》、上海の《文汇报》は「5・20事件」の実際の状況をくわしく伝えたが、国民党政府はこれらの新聞を差し押さえた。

闘いは南京だけでなく、北京、上海、蘇州、杭州その他に拡がる大運動となり、学生への弾圧は多くの人々の怒りを呼んだ。学生たちは更に「無期限スト」にと傾いていったが、共産党中央の上海局は、地下党員を通して、この過激な方針をやめるように指導した。学生たちは議論を重ね、ついにこれを受け入れた。

しかし国民党政府は、南京と各地の大学・高専で、自治会リーダーや積極分子を除籍し、一部を威嚇して辞めざるを得ないように迫った。こうして多くの自治会を半身不随にし、活動できないようにした。

## 24 大学へ

「反飢餓・反内戦」の5・20の

集中した。小宝は北京大学、復旦大学、武漢大学などに出願した。8月の中下旬にかけ、新聞紙上の発表で、



小宝は武漢大学、復旦大学、北京大学に合格した。彼は北京大学の東方言語学部に進みたかったが、地下党の指導部は、上海に属する復旦大学を薦めた。

彼は希鷹、志豪、玉美を訪ね、別れを告げた。希鷹は小宝との別れがつかかった。彼らは小さい時から共に成長し、共に進歩して地下党にも参加した。互いに相手の心の底までも理解し、目つきや微笑み、表情は電波のように伝わった。希鷹は、自分たちは別れても、共同の事業をしており、ただ別の塹壕にいるに過ぎない、将来の勝利の後に会おうではないかと言った。小宝は涙があふれ、希鷹兄さんとの別れが辛くてたまらなかった。最後に、気懸かりな二番目の姉の秀華のことを、彼に頼んで別れた。

玉美とも何度も話し合った末、名残を惜しみつつ別れた。玉美は心の中で、この後再び会えるのだろうか、革命工作のために犠牲になった人もいるのではないかと不安に思った。小宝の方は、年もやや若く、ひとすら革命のことを考えるのみで、これから後結婚し、家庭を持つという問題など、全く考えていなかった。二人が恋愛関係にあると認め、うまくやっついていこうと思っていたが、高校卒業以後、一緒にいた時間もあまりなく、これからどうなるのか、彼ら自身では決められず、多くのことが未知数だった。これからの日々も長いかもしいないが、短いかもしいない・・・と感じていた。

1947年9月のある日、林家宝は上海北駅で降り、復旦大学へと向かった。道路の両側は一面の農地で、

路上には誰もいない。ポケットに合格通知書を入れて、名だたる「新聞学科」の建物へと歩いた。

(つづ)